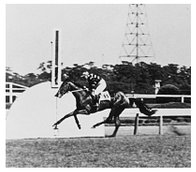

ムカシの競馬を読む

須田鷹雄（すだ たかお）

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第132回 10年・20年・30年前の9月

いまから10年前、平成18年の9月というと、スプリンターズSが10月1日施行だったので、G1は無かった月。G2ではバランスオブゲームがオールカマーを制している。結果的にはこれが最後のレースとなったバランスオブゲームだが、重賞7勝、うちG2を6勝というのは見事な戦績。平地G2を6勝した馬というのは現時点でこの馬だけとなっている。

この平成18年9月は吉永正人調教師や詩人の志摩直人氏が亡くなり、昭和の競馬が消えつつあることを感じさせる月であった。一方、物質的に反映した21世紀の競馬を感じさせたのが、以下のニュースである。9月13日の東京新聞から引用しよう。

「世界最大の映像スクリーンとなる三菱電機製『ターフビジョン』が東京都府中市の東京競馬場に設置され、12日、関係者に公開された。縦11・2メートル、横66・4メートル（表示面積744平方メートル）はテニスコート3面分で、大阪・住之江競艇場の松下電器製のスクリーン（667平方メートル）を上回り、ギネス社に『世界最大』と認定された」

「三菱電機は昨年11月に日本中央競馬会（JRA）から受注し、長崎製作所で約10ヶ月かけて製作。35分割してトレーラーなどで運び込み、クレーンで組み上げた。設置工事費などを含めた製造費用は約32億円（後略）」

ターフビジョン自体は昭和のうちに登場したものだが、当時はまだ貸双眼鏡なども提供されていたし、これだけの規模のものが登場するとは誰も想像していなかった。

ところでこのギネス記録には後日談がある。3年後、川崎競馬場がそれまで使っていた「キングビジョン」を横に28メートル拡張して「ドリームビジョン」と名付け、1152平方メートルのサイズを実現してしまったのだ。しかも原資にはJRA由来の助成金が含まれていたようで、当時あるJRA職員が「空気読めよ……」とボヤいていたのを思い出す。

もっとも、さらに1年後にはドバイのメイダン競馬場がドリームビジョンより17・8平方メートルだけ大きいスクリーンを実現。こちらに記録を奪われたので、どのみちJRAに勝ち目はなかった。それにしても、大きいモニターの記録が競艇場→競馬場→競馬場→競馬場と変遷していったというのは、公営競技ファンとして（メイダンは馬券は売っていないが）、なにやら誇らしいところでもある。

続いて20年前、平成8年の9月から、まずは海外での偉業を振り返ってみよう。9月30日付のサンスポから引用する。

「欧州の人気騎手ランフランコ・デットーリが、28日のアスコット競馬場で行われた全7レースに騎乗し、すべてに勝利するという英国史上初の快挙を演じた。この日はG1クイーンエリザベス2世Sも行われ、デットーリはマークオブエスティームで同レースを制覇。最終7レースでもフジヤマクレストを勝利に導き、見事7連勝を飾った」

この時期のデットーリは本当に神がかっていた。世界のどこかでは全レース優勝という記録が他にも達成されているのだろうが、一流の競馬場、しかもG1を含む形はそうそう出てこないはずだ。

同じ月、日本の天才騎手は父の記録を超えていた。8日付のスポニチから引用する。

「先週まで通算1163勝をマークし父・邦彦の記録に並んでいた武豊騎手は7日、阪神競馬3Rでゼットヒリューに騎乗して1着となり、父を超えるとともに通算勝ち星でも歴代10位となった。父が28年間かかって築き上げた記録を息子はわずか10年足らずで達成（後略）」

先日亡くなられた武邦彦さんの通算記録を10年足らずで……というのは他紙も同様に書いているのだが、昔といまのレース数や騎乗依頼のあり方を考えると、単純比較しては邦彦氏に申し訳ないところでもある。ちなみに現在だと北村宏司騎手や吉田豊騎手が「邦彦超え」を果たしたところで、昔は超一流騎手の称号だった1000勝騎手は、現役だけで13人いる。

もうひとつ20年前から。これは当時競馬をやっていた方なら覚えているだろう事件である。30日付の報知新聞から。

「前代未聞のサスペンデッド！　29日の新潟競馬2日目が6R以降中止になった。5R終了後、コンピューターの故障で馬券の発売や払い戻しができなくなったため。JRAは残る7レース分を30日に続行競馬として開催する」

記事によると、開催中の11時50分、計算機に内部障害が発生。通常なら自動的に予備系に切り替わるはずが、こちらもダウン。10分後に手動に切り替えたが、それでも動作しなかった。

やむを得ず6レースのスタートを繰り下げ初期状態に戻して復旧に努めたが、うまくいっても1時間以上はかかるということで開催の打ち切り、翌日の続行が決まったということである。

既に発売した前売り馬券の買い戻しはしないということでウインズ後楽園や錦糸町では騒いだ客もいたとのことだが、騒擾に至らなかったのは平和な時代である。それにしても、一番ダメージが大きかったのは「昼休み明けくらいに競馬場に着いて遊ぼう」と思っていた現地のファンだろう。他場の馬券も買えないし、そもそも競馬場は客を出してクローズしたようである。新潟は市内から競馬場までが遠いので、なおさらダメージ甚大だったものと思われる。

最後にいまから30年前、昭和61年の9月。この月からは、「いまだと全然騒がれないが、当時は大騒ぎ」という話を2つ取り上げる。

まずは9月2日付の中日スポーツから。

「連単でなんと42万2850円！　1日、島根県の益田競馬場で、中央・地方を通じて史上最高の大穴が飛び出した。公営では昭和28年、姫路で連単42万1920円という記録があるが、これを千円弱上回った」

3連単時代の競馬ファンからすると40万馬券でなに騒いでるの？という話だろうが、当時は「競馬界最大の大穴」だったのだ。そもそも益田がどんなところも知らず、中央競馬のファンはオールドファンを除くと連単（当時の益田は6枠連単）経験もなかった。

このレースの的中組番は2→3で的中は3票。これが3→2だったら1票で、史上初の100万円馬券になっていたそうだ。ちなみに昨年の中央競馬で出た「43万円以上の配当」は3連単だけで251本。100万馬券が81本。えらい時代になったものである。

もうひとつはこちら。16日付の夕刊フジより。

「中央競馬会に入った連絡によると、ヨーロッパ遠征中の日本ダービー馬シリウスシンボリは14日、仏パリ郊外のロンシャン競馬場で行われたフォワ賞に出走、2分38秒7で優勝したメルセイにクビ差まで迫る2着と好走した」

海外で日本調教馬が好走するのはいまでこそ普通のこととなっているが、当時凱旋門賞の主要プレップレース（当時の格付けはG3だったが）で上位に入るというのは夢のような出来事だった。

この結果を受けて各紙は「凱旋門賞もいける！」という論調になったのだが、さすがにそこまで甘くはなかった。この年の凱旋門賞といえばダンシングブレーヴがレコード勝ち。シリウスシンボリはブービーだった。それでも当時の我々は、血湧き肉躍るくらいの気持ちでレースを迎えたのである。

ムカシの競馬を読む

平成18年・中山競馬場
オールカマー
優勝馬：バランスオブゲーム

© JRA